日蓮大聖人御書全集

四条金吾殿御返事（しじょうきんごどのごへんじ）

（所領加増の事（しょりょうかぞうこと））

新版1604～1606

四条金吾殿御返事（所領加増の事）

弘安元年（'78）10月　57歳　四条金吾

鵝目一貫文、給び候い畢わんぬ。

御所領、上より給わらせ給いて候なること、まことと

も覚えず候。夢かとあまりに不思議に覚え候。御返事な

んどもいかように申すべしとも覚えず候。

その故は、とのの御身は、日蓮が法門の御ゆえに、日本国

ならびにかまくら中、御内の人々、きゅうだちまでうけず、

ふしぎにおもわれて候えば、その御内におわせんだにも

不思議に候に、御恩をこうぼらせ給えば、うちかえし、
ふしぎそうろう　ごおん　被　たま　打　返

またうちかえしせさせ給えば、いかばかり同れいどもも
たま　どう　隷

ふしぎとおもい、上もあまりなりとおぼすらん。されば、
不思議思　かみ　余　思

このたびは、いかんがあるべかるらんとうたがい思い候い
疑　おも　そうら

つる上、御内の数十人の人々うったえて候えば、されば
うえ　みうち　すうじゅうにん　ひとびと　訴　そうら

こそ、いかにもかないがたかるべし、あまりなることなり
叶　難

と疑い候いつる上、兄弟にもすてられておわするに、か
うたが　そうら　うえ　きょうだい　捨

かる御おん、面目申すばかりなし。
ご　恩　めんぼくもう

かの処はとのおかの三倍とあそばして候上、さどの国
ところ　殿　岡　さんばい　そうろうえ　佐　渡　くに

者

のもののこれに候が、よくよくその処をしりて候が申し候は「三箇郷の内に、いかだと申すは第一の処なり。田畠はすくなく候えども、とくははかりなし」と申し候ぞ。二所はみねんぐ千貫、一所は三百貫と云々。かかる処なりと承る。

同　隷　親　捨　果　笑　喜　殿　岡　劣

なにとなくとも、どうれいといい、したしき人々と申し、すてはてられて、わらいよろこびつるに、とのおかにおとりて候処なりとも、御下し文は給わりたく候いつるぞかし。まして三倍の処なりと候。いかにわろくとも、わろ

悪

きよし、人にもまた上へも申させ給うべからず候。「よきところ、よきところ」と申し給わば、またかさねて給わらせ給うべし。「わろき処、徳分なし」なんど候わば、天にも人にもすてられ給い候わんずるに候ぞ。御心えあるべし。

阿闍世王は賢人なりしが、父をころせしかば、即時に天にもすてられ、大地もやぶれて入りぬべかりしかども、殺されし父の王、一日に五百りょう・五百りょう、数年が間、仏を供養しまいらせたりし功徳と、後に法華経の檀那とな

るべき功徳によりて、天もすてがたし、地もわれず、ついに地獄におちずして仏になり給いき。

とのもまた、かくのごとし。兄弟にもすてられ、同れいにもあだまれ、きゅうだちにもそばめられ、日本国の人にもにくまれ給いつれども、去ぬる文永八年の九月十二日の子丑時、日蓮が御勘気をかぼりし時、馬の口にとりつきて鎌倉を出でてさがみのえちに御ともありしが、一閻浮提第一の法華経の御かとうどにてありしかば、梵天・帝釈もすてかねさせ給えるか。仏にならせ給わんことも、かくの

ごとし。いかなる大科ありとも、法華経をそむかせ給わず仏にならせ給うべし。

候いし御ともの御ほうこうにて、

例せば、有徳国王の、覚徳比丘の命にかわりて釈迦仏とならせ給いしがごとし。法華経はいのりとはなり候いけるぞ。あなかしこ、あなかしこ。いよいよ道心堅固にして、今度仏になり給え。

御一門の御房たち、また俗人等にも、かかるうれしきことと候わず。こう申せば、今生のよくとおぼすか。それも凡夫にて候えば、さも候べき上、欲をもはなれずして仏

になり候いける道の候いけるぞ。普賢経に法華経の肝心を説いて候。「煩悩を断ぜず、五欲を離れず」等云々。天台大師の摩訶止観に云わく「煩悩即菩提・生死即涅槃」等云々。竜樹菩薩の大論に法華経の一代にすぐれていみじきようを釈して云わく「譬えば、大薬師の能く毒を変じて薬となすがごとし」等云々。「小薬師は薬をもって病を治す。大医は大毒をもって大重病を治す」等云々。

弘安元年戊寅十月　日

日蓮　花押

四条金吾殿御返事